資料 8

令和４年８月１７日

瀬戸市議会議長　水野良一　様

住　所　瀬戸市[redacted]

氏　名　瀬戸子ども笑顔の会[redacted]

代表[redacted]

連絡先[redacted]

児童のマスク着用および感染症対策に関する陳情書

要旨（趣旨）

この度は陳情の機会をいただき誠にありがとうございます。2020 年から新型コロナウイルス予防の感染症対策を国民、市民が協力し合って行ってきました。新型コロナウイルスと共存して 2 年半が経ち、花粉症の時期も終わり熱中症の時期に入ったことから、マスクなどの感染症対策を徐々に解除していく風潮になってきていますが、感染症対策が常識化してしまった今、なかなか学校や普段の生活の中で今更マスクを取るように促すのが困難になってきていると聞いています。厚生労働省は昨年も今年も、熱中症対策としてマスクを外して良いと公表していたものの、実際にはなかなか教育現場では実行しづらいといった傾向にあったのではないでしょうか。その事も踏まえ、今一度、感染症対策がもたらす児童の成長過程への影響も考慮し、市からも学校及び子どもが集まる施設への呼びかけを強化していただきたく陳情させていただきたいと思います。

そもそも 10 代以下の児童が新型コロナウイルスで死亡したという事例は極めて稀で、厚生労働省令和 4 年 8 月 9 日報告によると 2 年半の期間の中で 23 名にとどまっており、またこのほとんどが基礎疾患を持つ児童です。このように厚生労働省が公表する数字は莫大な資料の中に埋もれてしまい、コロナウイルスの恐ろしさばかりが報道されてしまった結果、マスク着用、ソーシャルディスタンス、仕切り板、黙食、修学旅行や運動会の中止などといった対策が 2 年半に渡り取られてきました。マスクに関しては、寒い冬や花粉症の時期が終わり、すでに熱中症の時期に入っています。それに伴い厚労省から登下校や体育の授業においては児童のマスクを外すようにとの通達がされております。しかし、冒頭にも述べましたように今学校では常識化したルールを今更止めることに、先生も児童も少なから

瀬戸市議会 受付 '04.8.18 4瀬議陳第 13 号 [redacted]

ず抵抗があるという状況になっておりますので、マスクをした時のリスクという面についても学校の先生および保護者に周知させる必要があるのではないでしょうか。

6月末には、瀬戸市内の小学校において児童11名が体育の授業中に熱中症で倒れ救急搬送され、全国ニュースでも報道されました。この時、担任の先生は子どもたちにマスクを外すようにと強く指導したものの、半数の女子生徒が「顔を出すのが恥ずかしい」と言ってマスクを外さなかったと同学校の児童から報告を受けており、必要のない場面では適宜マスクを外すという判断ができない状況になっているといえるのではないでしょうか。

例えば昨年には小学5年生の児童が、体育の授業でマスク着用のまま持久走中に倒れ、健康な子どもが死亡するというニュースがありました。また修学旅行ではマスク着用で就寝するよう指示している学校もありました。マスク内で長時間呼吸することは二酸化炭素過多になり、頭痛の原因となったり、口呼吸により免疫が下がったり、歯周病の原因となることが指摘されています。また、年齢が下の幼稚園児、小学生低学年の児童が、人の表情がはっきり分からないまま育つことへの精神的成長欠如のリスクも懸念されておりますし、喘息などの呼吸疾患の児童もいます。このような子どもたちに学校のルールで同調圧力がかからないよう市内の学校に市のほうからも呼びかけをお願いできれば幸いです。

児童のマスクに以外にも、ソーシャルディスタンス、仕切り板、黙食、修学旅行や運動会の中止などといった対策に関しては、コミュニケーション能力を育てるという学校の大切な課題が損なわれるのではと心配しております。感染症対策を始めた2020年から子どもの不登校、引きこもり、自殺が増える傾向にあり、文部科学省の調査によりますと昨年不登校の小中学生はおよそ19万6000人と前年度から比べても1万5000人近く増えて過去最多になっています。更に今までは不登校と言えば、いじめなど友人関係が主な原因とされていましたが、統計によりますと、いじめは減少傾向となり、逆に無気力、不安、生活リズムの乱れというコロナ感染症対策が原因の1つに挙げられており、文部科学省児童生徒課でもコロナ禍による学校や家庭の県境変化が子どもの行動に大きな影響を与えていると分析しています。

添付資料の今年8月の厚生労働省速報にもあるように2020年から累計2年半におけるPCR陽性死亡者数が23名ですが、その一方で2020年（令和2年）に自殺した小中高生は415名であり、前年度と比べても100名近く増加しています。過剰なコロナ感染症対策で無気力や不安を増長してしまうのでは本末転倒です。さらに今後は、AIが進歩することで更なるコミュニケーション能力が必要とされる中、コミュニケーション能力が損なわれるような感染症対策が今後どう影響するかも心配です。本当に人と人とのコミュニケーションを断つようなソーシャルディスタンス、仕切り板や黙食といった感染症対策は子どもの成長過程に問題を残さないかを今一度振り返る必要があるのではないでしょうか。

以上のことを十分注意して学校に問題の呼びかけをお願いしたいと思います。

（陳情項目）

1．教育、保育の場、瀬戸市の公共施設にあたっては、コロナウイルスの脅威ばかり煽るのではなく、熱中症が増える時期の感染症対策としてのマスク着用の危険性の啓発もお願いしたい。
2．教育、保育の場ではコミュニケーション能力を育てることにも重点を置き、過剰な感染症対策が不登校を助長していないか再検討し、引きこもりや自殺撲滅活動にも力を入れてもらいたい。

以上

参考資料：

https://headtopics.com/jp/12510124731246372027 9-20329843
https://www.mhlw.go.jp/content/10906000/000975417.pdf
https://www3.nhk.or.jp/news/html/20211217/k10013362471000.html
https://www3.nhk.or.jp/news/html/20211013/k10013305371000.html
https://toyokeizai.net/articles/-/466970